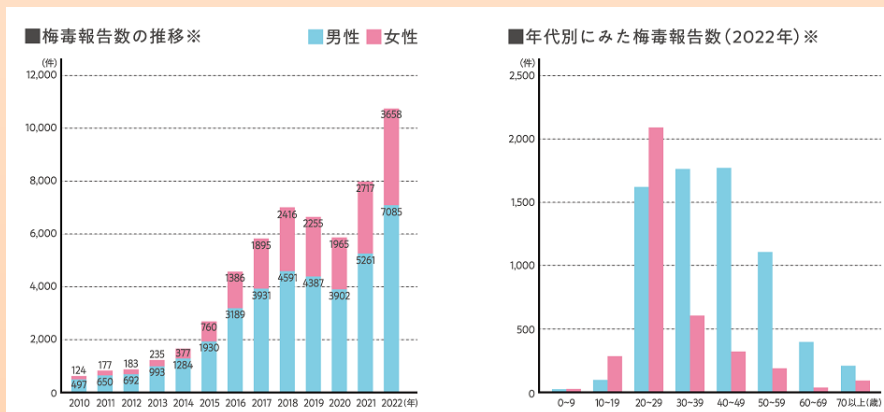


先に開催されたパリ五輪では、「選手村でのコンドーム無料配布」というニュースが話題となりました。実は、この取り組みは HIV（ヒト免疫不全ウイルス）やエイズへの意識を高めることを目的に、IOC（国際オリンピック委員会）による性感染症予防のプロモーションの一環として 1988 年のソウル五輪から行われています。

そうした中、日本では近年、性行為感染症（STI）は増加傾向にあります。当院でも、10 代、20 代の若い患者さんに、STI が多く、スポーツ選手も例外ではありません。代表的な STI について、正しい知識を得るようにしましょう。

1) 梅毒

最も顕著な増加を見せており、特に若年層での感染が増えています。



主な症状は、性器や口の中に小豆から指先くらいのしこりや痛みの少ないただれができることです。その後、痛み、かゆみのない発疹が手のひら、足の裏、体中に広がりますが、症状が消えても感染力が残っているのが特徴です。治療せず、放置していると、数年から数十年の間に心臓や血管、脳などの臓器に病変が生じ、時には死にいたることもある恐ろしい病気です。

2) クラミジア

一時期減少傾向でしたが、再び増加傾向にあることが報告されています。

現在、最も感染者の多い STI で、妊婦健診をうけた人の 3~5% にクラミジア保有者が確認されているため、自覚症状のない感染者がかなりの数に上ると考えられます。男性では尿道炎が最も多く、排尿痛、尿道不快感、膿尿などの自覚症状がやすいのですが、女性はほとんど症状のない場合が多いです。

3) 淋菌

クラミジアと同様、減少後再び増加傾向にあります。クラミジアに比べ、感染者数は少ないですが、男性は尿道炎、女性は無症状で経過するなど、症状からは区別が付きません。

クラミジアも淋菌も感染に気付かぬまま進行してしまうと、男性は、精巣のあたりが腫れて発熱したり、女性は、下腹部痛、不正出血、性交痛を生じたりします。また、男女ともに、不妊の原因にもなります。

以上、代表的な STI について、説明しましたが、他にも、性器ヘルペス、尖圭コンジローマ、トリコモナス症なども、ありふれた STI です。これら STI 増加の原因として考えられるのは、コロナ禍の影響による性行動の変化や、SNS の普及による性的パートナー数の増加が指摘されています。STI は自覚症状のないまま、気づかぬうちに感染を広げてしまうという点が問題ですが、簡単な検査で診断でき、抗生物質など、効果的な治療法が確立されているので、早期発見、早期治療が大切です。性交渉のある方は、コンドームの使用やパートナーとのコミュニケーションなど、安全な性行為を心がけ、気になる症状がある場合や、不安な場合は、医療機関を受診することをおすすめします。地域の保健所でも相談や検査を受けることができます。ご自身やパートナーの健康を守るために、性感染症について正しく理解し、適切な行動を取りましょう。